

ギョーザの来た道

——あわせて1940年代以前の中国東北／旧満洲の言語状況について——

Where did *Gyoza* Come from?: Also Discussing on the Linguistic Situation in Northeast China/Formers Manchuria Prior to the 1940s

遠 藤 雅 裕

要 旨

本論は、焼餃子を指すギョーザということばの由来についての考察である。ギョーザは、まず戦前に満洲の日本人社会で借用され、敗戦後日本国内にもちこまれて1950年代に普及した。ギョーザの供給言語は漢諸語の一つ、山東から東北南部にかけて分布する膠遼官話、特にその下位方言の登連片と考えられる。当該方言では、中古音見曉組の音価 (k, kʰ, h) が前舌狭母音の前でも保存されている。戦前の満洲地域を対象とした中国語学習書の音声特徴も当該方言と一致するために、これがギョーザのギョーという音の基盤であると判断できる。しかし、現代東北の膠遼官話ではこのような音声特徴がみえず、また膠遼官話にギョーザに類似した語も記録されてないことが問題として残る。これらについては、つぎの仮説を提案する。一つめは、言語変化は短期間に急激におきるという Dixon の断続平衡モデルによる説明である。二つめは東北官話の語「餃子」を膠遼官話で発音した可能性である。

キーワード

餃子、漢諸語、官話、中国語学習書、言語接触

0. はじめに

本論は二部からなる。第一部ではギョーザ（「ギョウザ」, 「ギョウズ」等のバリエーションをふくむ）という名称の借用過程を明らかにする。つぎに第

二部ではギョーザの供給言語について考察をする¹⁾。結論を述べれば、ギョーザは戦前に大連など旧満洲の日本人社会で借用され、敗戦による日本人の引揚以後、1950年代を中心に「餃子」そのものとともに普及した。このギョーザの供給言語は山東半島から遼東半島・鴨緑江沿岸にかけて分布する膠遼官話、特にその下位方言の登連片である。膠遼官話登連片の一部では、中古音見曉組 (k, k^h, h) が前舌狭母音 (i, y 等) の前でも保存されているが、このような状況がギョーザのギョーという音の基盤になったといえる。また、戦前は膠遼官話の分布域は現在よりも広く、北は長春以北までおよんでいた。

ギョーザには、このような言語的基盤があったと考えられるが、次のような二つの問題が存在している。一つめは、上述のようなギョーザにみえる音声特徴そのものが現在の中国東北地域の漢語にはほぼ存在せず、現在の現地の言語の中にその直接的証拠を求めることがほぼ不可能であることである。二つめは、ギョーザに類似する単語そのものが調査報告や辞書類の記録にみえないことである。

これについては、つぎのような仮説を提案する。一つめについては、言語変化は短期間に急激におきるというディクソン (Dixon) の断続平衡モデル仮説による説明である。二つめについては、東北官話などでもちいられている「餃子」を膠遼官話音で発音した可能性である。

1. 「餃子」の呼称の交代

ギョーザは戦前、主として関東州をふくむ満洲地域の日本人社会で使用されていたが、敗戦による日本人の帰国にともなって、戦後に日本国内で一般化した。また、以下に紹介するように当時の現地の日本人にはギョーザが山東の言語に由来するという認識があったのである。

1.1. ギョーザに関する記述

管見によれば、書籍でギョーザを論評した最初期のものは『支那語漫談』（渡會貞輔，1932年）である。本書は中国語をめぐる短編集なのだが、この中に「大高評の「ぎょうざ」」（pp. 40-41）というつぎのような短文がある。

奉天新聞の廣告欄に「支那御料理は専門、大高評のぎょうざ、御注文はお馴染みの千成」といふ日本人店の支那料理廣告が麗々しく掲げられて居る、そこでこのぎょうざなるものは抑々如何なる料理かといふに是は説明するまでもない諸君先刻御承知の餃子即ち豚饅頭である、餃子の正音はチァーォ、ヅで没気音の關係上チとツは多少濁音に近くなるのは免れ難いが却説チがぎとなるのは恐らく^{コック}廚子が山東人か廣東人だからであろうがヅがザに聞こえるのは多少滿洲音の關係もある、要するに是は聞く日本人の耳が悪いことに歸着するのである。

ここから、1930年代初頭発行と思われる新聞の広告に「ぎょうざ」が使用されており、当時、滿洲の日本人社会ではギョーザという呼称が普及していたことがわかる。またここから、渡會は關東州在住であつたにもかかわらず、ギョーザにはなじみがなかったか、またはそれを避けていたことがうかがえる。渡會は東京外国語学校支那語科を卒業したのち關東州にわたり、關東庁外事課の通訳官ならびに支那語奨励試験委員をつとめ、また旅順工科大学で中国語を担当していた（竹中 2004:251）。このような経歴や地位が、ギョーザという呼称から彼を遠ざけていたのかもしれない。

一方、神奈川大学教授の那須清は、やはり關東州旅順在住であつたが、1931年から旅順第一尋常高等小学校で受けていた中国語（支那語）の授業のできごとを、つぎのように回想している。

(前略) ……三人目の先生が来られた。この先生が初めての時間に、「餃子」をジャオーズと発音されたので、みな思わずふき出した。山東方言ではギョーズまたはギョーザで、ジャオーズという支那語は誰も聞いたことがなかったからである。(那須 1992:98-99)

以上の渡會と那須の記述から、ギョーザは、少なくとも1930年代初頭までには満洲の日本人社会で一般化していたと断定してよいであろう。

この10年ほど後になる染木(1941)は、ギョーザが大連などの日本人社会で普及していること、それが山東省のことばに由来することを、つぎのように指摘している。

(前略) ……近來日本人のこれ(鍋貼餃子: 筆者補)を愛好する者多く、ヤキプタマンヂュー又ヤキギョウザと稱へる。ヤキギョウザとは焼いた餃子の日支合辦語である。餃子本來の發音は chiao³ zu であるが山東人は chi を ki ki を chi と發音し…(中略)…子は正式の發音は tzu であるが北支の市井人特に婦女子はそれが語尾の助詞となって居る場合に tza と發音する癖があるから chiao tzu は kiao tza となる。それに日本語のヤキを加へてヤキギョウザなる語が生まれたのであるが、日本人の間でのみ使はれる言葉でなく支那人まで店頭に片假名でヤキギョウザ等と書いて得意になっている。(pp. 30-31)

確認した範囲では、ギョーザについてのややくわしい考察は、これが最も古いものである。ギョーザが日本人のほか、日本人を相手に商売をしていた現地の中国人にも使われていたことがうかがえる。

このころの旅行関係書にもギョーザ系のことばが登場する。たとえば、『滿支旅行年鑑 昭和15年』にも、「鍋烙餃子(クヲオラオチヤオツ)」の説

明に「焼ギョウズ（俗に云ふ焼豚まんじゅう）」(p. 337)とある。「鍋烙餃子」の読み方はチャオツ系であるが、対訳語はギョーザである。同書が日本国際観光局満洲支部の編になることと関係があるかもしれない。

当時の在満日本人にとって「ヤキギョウザ」が身近であったことは、満洲の新京（長春）で出版された旅行中国語会話書『滿支旅行用語』（荻山貞一、1944年）に、日本人旅行者のセリフとして「ハイヤオグオティエヂアオツ（還要鍋貼餃子）、イーゴレンシーゴ（一個人十個）」（それから焼豚饅頭十個づゝだ）(p. 108) がでてくることからもうかがえるだろう。

それが日本国内で一般化したのは戦後、1950年代である。中国からの引揚者が「餃子」そのものとともぎョーザという呼称ももたらししたのである。田中静一は満洲国政府職員として食品の研究に従事し、戦前から戦後にかけて「餃子」の現場により近い所にいた専門家である。田中（1987）では、「餃子」は戦後2～3年で普及したとし、つぎのように述べている。

その餃子が終戦後二～三年で全国に普及したのは、大陸で生活していた引き揚げた人々の大陸に対する郷愁の味の故であろう。…（中略）…

この人々の全部の生活が豊かなわけではなく、開拓団員、下級兵士、小企業の店員などは、高級な中国料理店で卓料理を食べる機会がほとんどなく、中国料理といえば、餃子、麺類、包子、饅頭、煎餅の類であった。どれも一皿一五銭から二〇銭のものである。中国大陆にはこのような階級の日本人が多かったのである。

この人々は、餃子の味を身につけて引き揚げ、日本全国に住みついた。商才にたけたものは、生活のために餃子の店を開いた。このような店にまず引揚者が大陸の味を求めて来たり、簡単に作れるので家庭でも作った。(pp. 224-225)

以上、ギョーザという呼称は「餃子」そのものとともに、当初、大連など現地の日本人社会の、主として庶民層に普及し、敗戦後に満洲地域から引き揚げてきた人々によって、日本国内で普及することになったとまとめることができる。

1.2. 日本国内でのギョーザの普及

つぎに、戦後、日本国内でギョーザが広まっていく過程を、古川緑波・立川談志・松本一男等の著作や、料理書・新聞記事等に基づいて復元してみよう。

古川緑波は戦後10年の、つまり1955年ごろの回想として、つぎのように述べている。

先ず、戦後はじめて、東京に出来た店に、ギョーザ屋がある。…（中略）…
ギョーザ屋とは、餃子（正しくは、鍋貼餃子）を食わせる店。…（中略）…
僕の知っている範囲では、渋谷の有楽という、バラック建の小さな店が、一番早い。（古川 1995:147-148）

緑波は、ほかに、1944年12月27日の日記に叔母にもらった「餃子」を食べたことを記しているが、この「餃子」が焼き餃子だったのか否か、そしてそれをギョーザといったのか、またはチャオズだったのかについての記述はない。

落語家の立川談志も昭和20年代の後半ごろ、つまり1950～54年ごろ、ギョーザというものをしったという（立川 2000）。

中国文学者の松本一男は、戦後、生活のために「餃子」の屋台をはじめ、「チャオズ」という看板をだしたがまったく売れず、「ギョーズ」に変えたら急に売れ出したというエピソードを紹介している（松本 1957:13）。このエ

ピソードは、染木（1941）・田中（1987）の記述とも符合する。つまり、日本人は、満洲でギョーザということばとともに「餃子」の味をおぼえたのである。

料理書については、戦前はほぼチャオズ系一辺倒であった²⁾。表1に示めたように、「チャウズ」（『家庭實用支那料理』、1933年）・「チャオズ」（『主婦之友 花嫁講座 第二巻 洋食と支那料理』、1939年）・「チャオツ」（『お鍋一つ

表1 新聞の料理関係記事・料理書の記述

出版年月日	「餃子」の呼称	出典
3309	チャウズ（餃子）	『家庭實用支那料理』
3409	シュイチャオズ（水餃子）	『四季の支那料理』
3908	チャオズ（餃子）	『主婦之友 花嫁講座 第二巻 洋食と支那料理』
4005	チャオツ	『お鍋一つで出来る支那料理と支那菓子の作り方』
4212	チョーツー（餃子） ^{注)}	『改訂増補 一般向支那料理』
470704	チャオズ（餃子）	讀賣新聞
5004	チャオズ（餃子）	『西洋料理と中華料理』
520107	ハイロースイチャオツ（蟹肉水餃子）	朝日新聞
521203	チャオズ（餃子）	朝日新聞
5405	やきチャオツ（焼餃子）/ 蒸しぎょうざ	『一年中役にたつ家庭向西洋中華料理独習書』
540718	<u>ギョーザ</u> （餃子）	毎日新聞
550326	<u>ギョウザ</u> （餃子）	讀賣新聞
560926	<u>ギョウザ</u>	讀賣新聞
561103	チャオツ（餃子）	讀賣新聞
570209	<u>ギョウザ</u> （餃子）	朝日新聞
570217	<u>ギョウザ</u> なべ	讀賣新聞
580209	チョンミエンチャオツ（蒸麵餃子）	讀賣新聞
580213	<u>ギョウザ</u>	毎日新聞

※ 下線部はギョーザ系

注) 出典が上海料理中心であるために、「チョーツー」という呼称は呉語由来であろう。

で出来る支那料理と支那菓子の作方』（『主婦之友』第二十四卷第五號付録）、1940年）などである。ギョーザは戦後1950年代になって登場する。たとえば、『西洋料理と中華料理』（主婦之友社、1950年）ではチャオズのみだったが、『一年中役にたつ家庭向西洋中華料理独習書』（『婦人生活』1954年9月号付録）には、「チャオツ」と「ギョウザ」の二通りの呼称が登場する（「焼餃子（やきチャオツ）」p. 200, 「蒸しぎょうざ」p. 306）。本書の執筆者である専門家の間にもギョーザがはいりこんできたことがうかがえる。新聞記事にギョーザがみえるようになるのも1954年以降である。また、植原（1962）「明治大正昭和 飲食物年表 第二部大正篇昭和篇」では昭和34年（1959年）の条に「餃子（ぎょうざ）店…（中略）…など続出」と記述されており、1950年代末

表2 辞書類の記述

出版年月(版)/ 初版	書名	見出し字/語	記述
3603(6)/3112	注音對譯華語辭典	餃 chiao3	豚饅頭, 豚肉又は牛肉を細碎したるものに少許の野菜を入れメリケン粉の皮にて包み湯に入れ煮たるもの
3303(1)	華語大辭典	餃 餃子	豚饅頭 同上
3812(4)/3506	最新支那語大辭典	餃子 chiao-tzū	シンコへ油ヲ加へ能ク捏り混ぜ其中へ色々ノ肉餡ヲ入レテ蒸シタルモノ, 肉マンデウ
4309(1)	日常支那語圖解	蒸餃 煮餃 鍋貼	蒸した柏餅のような恰好の肉饅頭。 煮た柏餅型の肉饅頭。 餃子を鍋に油を入れて焼いたもの。
4812(2)/4506	支那官話字典	餃 chiao3	【餃子】肉饅頭ノ一種, 薄キ麪ニテツツミ湯ニ煮テ食フ, 或ハ蒸テモ食フ。
5805(1)	簡約中日辭典	餃 jiǎo	(-子)半月形の豚肉饅頭, ギョウザ
5909(2)/5006	華日大辭典	餃子 chiao3 tzū	多く北方に於て賞用される食物の一, 肉と野菜類を細かく刻みうどん粉の薄くこね延ばしたもので包んで蒸し又は焼き或は水たきをして食べる。

には「餃子」とともにギョーザも普及していたことがうかがえる。

このような状況は保守的な辞書類にも影響しており、1950年代後半にはギョーザを対訳語にしているものが出版されている（表2）。なお、前掲の『満支旅行用語』でも取り上げたように、戦前は、餃子はチャオズではなく、もっぱら「豚饅頭」と呼ばれていたことが辞書の記述からもわかる。

以上のように、満洲からもたらされたギョーザは、敗戦から1950年代にかけて餃子店とともに広まっていったのである。

2. ギョーザの供給言語

ギョーザの由来については、「山東方言」説（出村 1932 [1938]・渡會 1932・染木 1941・松本 1957・那須 1992・田中 2014・桜井 2015等）が有力であるが、そのほかに満洲（マンジュ）民族の言語であるマンジュ語説がある³⁾。

しかし、ギョーザに類する語形は、山東半島から遼東半島にかけて分布する膠遼官話にはみえない。たとえば、山東半島では、「餃子」（特に水餃子）は「餛飩」[ku⁴² tʂa.]（榮成）ということが多い（後掲表15参照）。調査報告には「餃子」（水餃兒）（榮成 [ciau²¹⁴ tsɿ.]（王淑霞 1995）、牟平 [ciau²¹³ .tə]（羅福騰 1997））という語形も記述されているが、これは新しい語形である（羅福騰 1997:208）。一方、マンジュ語には giyose というギョーザに近い語形がある。これがマンジュ語説（石橋 2000）の根拠であるのだが、漢語からの借用語という指摘もある。このために、ギョーザという音声形式の基盤となる言語の確認からはじめる必要がある。そこで、まず「山東方言」説を検討しよう。

2.1. 「山東方言」説

山東省に分布している漢諸語（あるいは中国語方言）は官話のうち、冀魯官話・中原官話および膠遼官話である。また、満洲地域、すなわち現代の

東北地域（遼寧・吉林・黒龍江・内モンゴルの一部）に分布している官話は、主として膠遼官話・東北官話・北京官話である。本論では、ギョーザは主に膠遼官話登連片、特に煙威小片の音韻体系に基づくものとする。以下、旧満洲の言語状況を反映する日本人向け中国語学習書（以下「学習書」と略称）ならびに現代の膠遼官話および東北官話の字音データによって分析することにする。

2.1.1. 現代の東北官話と膠遼官話

現代の官話は、東北官話・北京官話・冀魯官話・膠遼官話・中原官話・蘭銀官話・江淮官話・西南官話の八つの下位方言にわけられる（『中國語言地圖集 第2版 漢語方言卷』）。これらのうち関係する東北官話と膠遼官話の状況について紹介しよう。

東北官話は遼東半島を除く東北地域に分布している。全体的な音韻特徴は、陰平の調値が北京官話よりも相対的に低いこと、止摂開口以外の日母字等がゼロ声母になる傾向があることである⁴⁾。下位方言は大きく三つに分類され、南から [1] 吉瀋片（遼寧東部・吉林東部・黒龍江東南部）・[2] 哈阜片（遼寧西部・吉林西部・黒龍江中南部・内モンゴルと遼寧吉林の省境付近）・[3] 黒松片（黒龍江北部・内モンゴル北部）である。北京官話でゼロ声母である“鵝愛安”等は、哈阜片では声母 *n*- が現れる。また北京官話のそり舌音 (*tʂ*, *tʂʰ*, *ʂ*) については、表3に示したように、下位方言間で *tʂ*-, *tʂʰ*-, *ʂ*- ~ *tʂ*-, *tʂʰ*-, *ʂ*- というバリエーションがある。

膠遼官話は山東半島から遼東半島・鴨緑江流域と黒龍江東部の一部に分布している。膠遼官話は山東半島から東北にもちこまれたが、その形成時期は大きく二つにわけられる。錢曾怡（2010:98）によれば、まず、清代前期から中期にかけて、山東の膠東（登州府と萊州府）の人々が渤海海峡をこえて遼東半島にわたり、膠東のことは大連から丹東にいたる地域にもちこんだ。つづいて清代後期から民国期にかけて、遼東にすでに定住してい

表3 北京官話・東北官話のts類とtʂ類の分合状況

		奏精	晝知	皺莊	咒章	摧清	錘澄	炊昌	蘇心	梳生	書書
1	北京型	ts	tʂ			ts ^h	tʂ ^h		s	ʂ	
2	哈爾濱型	ts	tʂ			ts ^h	tʂ ^h	tʂ ^h ~tʂ ^h	s	ʂ	
3	興城型	tʂ				tʂ ^h			ʂ		
4	瀋陽型	ts				ts ^h			s		
5	吉林型	ts~tʂ				ts ^h ~tʂ ^h			s~ʂ		

※ 上表の東北官話（2-5）のうち、哈爾濱型は哈阜片肇扶小片，興城型は哈阜片長錦小片，瀋陽型は吉瀋片通溪小片，吉林型は吉瀋片蛟寧小片に属す。

出所）錢曾怡主編（2010）

た膠東人や膠東地域を含む山東の人々，そして河北の一部地域の人々が，遼東半島以北および吉林の通化・長白山地域に移住したため，膠東のことばを基礎としたことばが東北のより北の地域にもちこまれることになった。

膠遼官話は，[1] 登連片（山東半島東半部および遼東半島）・[2] 青萊片（山東半島付け根の青島・膠州・青州等）・[3] 營通片（遼寧營口周辺・鴨綠江沿岸地域および黒龍江虎林周辺）の三つの下位方言にわけられる（錢曾怡 2010:95）。これらのうち，登連片は煙威（山東煙台・牟平・榮成，遼寧莊河等）・蓬黄（山東龍口・長島等）・大岫（遼寧大連・岫巖等），青萊片は青島（山東青島・諸城等）・青胸（山東臨胸等）・萊昌（山東萊州・昌邑等）・莒照（山東莒南等），營通片は蓋桓（遼寧丹東・桓仁等）・通白（遼寧通化等）・長集（吉林長白・集安等）の各下位方言区（小片）にわかれる（錢曾怡 2010:101⁵⁾）。

膠遼官話全体を大きく特徴づける歴史音韻論的特徴は，つぎの2点，すなわち，中古音清音声母入声字（「室」「黒」等）が上声になる傾向があること，および中古音止摂開口（「二」「兒」等）以外の日母字（「熱」「日」等）がゼロ声母になることである。このほか，声調については多くの地点では4声調体系であるが，山東半島の登連片（煙台等）や青萊片（平度等）には3声調体系も存在する。つぎに，下位方言の分類基準は，主として次の三つ

である（表4）。すなわち，[1] 中古音知莊章組が甲類と乙類にわかれるか否か（表5），[2] 尖団音を区別するか否か，またそれを区別する場合は団音が口蓋化するか否か，[3] 中古音蟹止山臻摂合口一等・三等韻の端母系字でu介音が脱落するか否かである。

これらのうち本論では，主として声母と韻母の特徴について検討する。声調を対象としないのは，学習書において，信頼できる声調データがとばしいためである。主たる検討項目は以下の4点である。

項目① 中古音日母字（止摂開口以外）がゼロ声母である。

項目② 中古音知莊章組が甲類と乙類にわかれる。

項目③ 尖団音を区別する。区別する場合は団音が口蓋化している。

項目④ 中古音蟹止山臻摂合口一等韻の端母系字でu介音が脱落している⁶⁾。

表4(1)(2)にしめしたように，項目②の知莊章組が二分しないのは營通片である。また表5は，甲類と乙類に二分する登連片と青萊片の声母の状況をしめしたものである。項目③については，団音字は登連片以外では口蓋化している（表4(3)）。なお，登連片でも長海以外の遼寧省内については，口蓋化して尖団音が合流している（張樹錚2012）。項目④については，u

表4 膠遼官話下位方言の音韻特徴

	(1) 知莊章組字の 声母が二分する か否か [*]	(2) 知莊章組字の 山臻摂合口前の 状況	(3) 尖団音の分合 状況と団音の音 価	(4) 蟹止山臻合口 が端母系と結び つくときの介音u
青萊片	照 _二 ≠ 照 _三	乙類	わける；tc組	ある
登連片	照 _二 ≠ 照 _三	甲類	わける；c組	ない
營通片	照 _二 = 照 _三	わけない	わけない	ある

* 表4の「照_二」は中古音三十六字母のうち照組二等字に現れる声母莊組，「照_三」は同じく照組三等字に現れる声母章組を指す。

出所）錢曾怡主编（2010：106）を一部改変

表5 中古音知莊章組甲類・乙類の声母

	甲類：支翅詩	乙類：知吃石	主要地点	方言区
1	tʂ tʂ ^h ʂ	tʃ tʃ ^h ʃ	榮成，文登，青島，莒南	登連煙威，青萊青島
2	ts ts ^h s	tɕ tɕ ^h ɕ	牟平，煙台，萊陽，棲霞	登連煙威
3	ts ts ^h s	tʃ tʃ ^h ʃ	威海，長島，龍口	登連煙威，蓬黃
4	ts ts ^h s	tʂ tʂ ^h ʂ	大連，普蘭店，萊州	登連煙威，青萊青島
5	tʂ tʂ ^h ʂ	ts ts ^h s	安丘，沂水	青萊青島，萊昌
6	tʂ ₁ tʂ ₁ ^h ʂ ₁	tʂ ₂ tʂ ₂ ^h ʂ ₂	濰坊市寒亭	青萊萊昌

出所) 錢曾怡主編 (2010 : 111)

介音が脱落するのは登連片のみである (表4 (4))。

本論では、膠遼官話の資料として、『煙台方言報告』(1982年)・『牟平方言志』(1992年)・『平度方言志』(1992年)・『榮成方言志』(1995年)・『普通話基礎方言基本詞彙集』(1996年)・『漢語官話方言研究』(2010年)・『大連方言語音研究』(2020年)等を利用する。また調査地点は、東北官話は長春(哈阜片長錦小片)，瀋陽(吉瀋片通溪小片)，膠遼官話は牟平・煙台・榮成(登連片煙威小片)，平度・諸城(青萊片青島小片)，大連(登連片大岫小片)・丹東(營通片蓋桓小片)である。

2.1.2. 学習書と研究方法

戦前の満洲地域の漢語を言語学的に記述している報告や資料は、管見のかぎりみつかっていない。そのために、上述したように、現地の言語状況を反映していると判断できる、発音表記付きの学習書をもちいることとする。これらの資料は「支那語」あるいは「満洲語」等を冠して出版されているものが多い(表6)。たとえば、『滿韓土語案内』(平山治久，1904年)は、山東人を介しているとはいえ、現地の言語を記述しようという意図がうかがえる。『支那語の講義 發音編 語法編 異同辨 附北京音と満洲音の比較』(青砥頭夫，1910年)は、「山東音」を「満洲音」とみなしている。一方、利用できない「満洲語」学習書もある。たとえば、内容が北京官話である

もの（『滿洲語會話』支那語研究會編, 1938[1939]年）、現地の状況を反映する内容だが発音表記が部分的であるもの（『家庭支那語』⁷⁾ 宮脇賢之助, 1935年／『對譯實用支那語會話篇』劉光, 1939年）、「井」キンのように尖音字にも軟口蓋音のような音注を付す等誤りが多いもの（『滿蒙語會話』下永憲次『短期支那語講座 附・滿蒙語會話』第三卷所収, 1938年）等である。

ところで、学習書のカナ表記の発音ルビについては、少なくともつぎのような二つの問題がある。一つは日本語の音韻体系に適合するように形づくられたカナそのものに内在する特徴であり、もう一つはカナの使い方の正確性である。

まず前者についてであるが、カナは多くが子音と母音が一体化したモーラ単位の文字であり、少なくとも単独で子音のみをあらわすことはできない。また、無気有気の区別はそのままでは不可能である。たとえば、チという文字は、無気音の *tci*, *tʃi*, *tɕi* 等だけでなく、有気音の *tcʰi*, *tʃʰi*, *tɕʰi* 等にも対応する可能性がある。ンは音節末子音にもちいられるが、*m*, *n*, *ŋ* 等を区別できない⁸⁾。中舌母音 *ə* はオともウとも表記されうる。そして、カナのみでは声調を表記するすべがない。よって、日本語と音韻体系のこととなる言語の音声を正確に表記しがたいのである。

もう一つは、表記の体系性についてのものである。これらの学習書は実用第一のため、その音声記述には精粗や幅があり、恣意的な表記にも陥りがちである⁹⁾。『家庭支那語』や『最新支那語大辭典』（石山福治, 1935[1938]年）「支滿字音對照表」のように北京官話との対照を通して結果的に音韻体系を意識したものになる場合もあるが、実用会話書は記述に一貫性がない場合も少なくない。これは書物の性格のほか、編著者の当該言語に対する習熟度合いや、記述に対する態度にも関係があるだろう。たとえば、同一の学習書の中で「凍」についてトオンとトン、「生」についてスンとスエン、「機」についてダイとジイという表記がある場合である。もちろん、

「了」のリヤウとラのように、文法化にともなう形式の摩滅の結果を記述していることもあるので、慎重に検討しなければならない場合もある。

このほか、誤植・誤記や脱字にも注意しなくてはならない。たとえば、チンがテンとなることもある。また活字や印刷の質の問題だが、チャン／チヤンのように拗音か否か、あるいは濁点がつぶれて半濁点か否か判断しにくい場合もある。いずれにせよ、このような限界があっても、貴重な記述資料として活用することが可能であることをあわせてしめすことを試みたい。

分析にあたり、表6にしめたように、旧満洲の言語状況を反映していると考えられる学習書6点を選定した。(1)『満韓』～(5)『親善』は膠遼官話を、(6)『旅行』は東北官話を反映していると判断できるものである。表中の「項目①」～「項目④」は上述した膠遼官話の音声特徴の検討項目である。記号はつぎのとおりである；○(該当する)，△(部分的に該当する)，×(該当しない)，？(判断不能)，数字(1～6)(項目②について表5の1～6の類型を指す)，k(中古音見曉組の特徴を反映)，—(データなし)。

これらの学習書に共通する特徴は、中古音日母字がゼロ声母になることである(項目①)。また、中古音蟹止山臻撮合口一等韻の端母系字でのu介音の脱落(項目④)も、『旅行』では部分的ではあるとはいえ、全体に共通している。つぎに、中古音知莊章組(項目②)については、『旅行』以外は甲乙にわかれるが、それが表5のどのタイプに該当するかは、カナのみでは判断しがたい。たとえば『衛生』で「知」はチと記述されるが、それがtɕi, tʃi, tɕɿのどれに相当するか確定できない。尖団音の区別と団音の口蓋化(項目③)については、『満韓』～『衛生』は区別があり団音は口蓋化していないが、『旅行』は団音が口蓋化して尖音と合流している。また『関東』と『親善』はカナのみからは判断しがたい。というのは、たとえば「濟」(精母)と「機」(見母)はいずれもジイと表記されるが、前者が口蓋化せずにtɕiを保存している可能性もあると判断したからである。現代の膠遼官話でも榮

表6 本論で参照した学習書

	書名〔略称〕	出版年	編著者名	反映している可能性のある言語と執筆状況	検討項目			
					①	②	③	④
1	滿韓土語案内〔滿韓〕	1904	平山治久	膠遼官話。在滿経歴のある山東人の協力あり ¹⁾ 。	○	○ 2～4	○k	○
2	支那語の講義〔講義〕	1910	青砥頭夫	膠遼官話。「山東音」を「満洲音」とみなす。	○	○ 2～4	○k	○
3	衛生部員ニ必要ナル満洲土語〔衛生〕	1936	關東軍軍醫部	膠遼官話。執筆者が実地調査を実施。	○	○ 2～4	○k	○
4	關東州農業移住者手引(改訂版)〔関東〕	1939	小倉鐸二	膠遼官話? 附録「簡易なる支那語(主として土語)」。	○	△ ²⁾ 2～4	?	—
5	親善は言葉から〔親善〕	1940	稻村青圃, 王作典, 鄒善本	膠遼官話。執筆者である中国人二氏は満洲出身の可能性がある ³⁾ 。	○	○ 2～4	?	○
6	滿支旅行用語〔旅行〕	1944	荻山貞一	東北官話。	○	×	×	△

注1) 「満洲土語は予の仁川に滞在せし間清國山東省人吳明堂君に囑託し、來原慶助君をして協力せしめ、その編纂方法を指示して脱稿せしむ、吳明堂君は満洲にあること十年、土語に精通し、日本語を善くす、……(以下略)」p. 3。

2) 「初」チュー・「船」チュアン・「春」チュン等、一部の字音に表5の2～4ではなく1, 5, 6に該当すると判断できる例があり、一様ではない。

3) 日華協会会長であった稻村氏の序によれば、王作典・鄒善本二氏は満蒙殖民協会の杉浦春之助氏に紹介されたとのことである。この満蒙殖民協会とは、大連で設立された満洲農業移民団体のようである(漆畑 2013)。よって、二氏が大連付近の出身である可能性も否定できないだろう。

成や平度では尖音はtsである(後掲表8)。これらについては2.1.3で検討する。

これら6点の学習書の中から、特に『衛生』と『旅行』の2点をえらび、網羅的分析の対象にする。『衛生』は、執筆者が実地調査をしていることが

うかがえ、上掲の学習書の中では当該言語の使用地域の特定をふくめて、全体的に記述の信頼度が高い。一方、『旅行』は実用書ではあるが、声調の記述を工夫するなど、記述の精度にこだわりがうかがえる。これらの書誌情報等はつぎのとおりである。

[1] 關東軍軍醫部編. 1936. 『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』。康徳圖書印刷所。

判型：105mm × 150mm, 108頁, 縦書き。

本書は、現地住民の医療・防疫にあたる衛生部員用の医療中国語会話書である。執筆は陸軍二等軍医弘島慶勝氏であるが、同氏の生卒年・経歴等は不明である¹⁰⁾。

凡例には「2. 本書記載の土語は主として新京附近及此附近以北に通ず、滿鐵沿線にありては奉天以北は大體に於て大差なきものと認めて可なり、吉林方面は滿鐵沿線より隔たること僅かなるも割合に差大なり、但し先づ大體に於て大差なきものと見て可なり」(カタカナ部分をひらがなに改めた、以下同)とある。つまり、本書は瀋陽から長春以北あたりまでの官話を反映しているといえる。

さらに「6. 滿洲語文の左に假名を振りたるも土語發音の假名音を充分に表し得ざりしは遺憾なり、語排列の關係上同一文字にても發音に於て僅か變化しあるに注意を要す。ㄱ印は中間音なり例えば去はㄱチ / キュイ¹¹⁾なり即ち「チ」と「キ」の中間音及「ユイ」より成るの意なり」と發音表記の工夫をしている。

目次に示された内容は、「診療業務(豫診・診断・治療・養生に関する諸注意・病名及身體各部名稱・傳染病)・衛生調査・衛生隊・教化行軍」である。本文は上下にわけられている。上段は中国語会話文、下段は日本語訳と解説である。

それぞれの中国語の文は漢字表記され、その左側にカナ、右側の一部に

ウェード式ローマ字による声調をふくむ発音が付されている。その下が日本語訳ならびに解説である。また「病名及身體各部名稱」は上下2段にわけられ、関連語（漢字・カナと対訳語・注記）が配列されている。

音韻面については、膠遼官話登連片煙威小片（牟平・煙台等）の特徴を色濃くもっている。しかし、団音字の声母が口蓋化しつつある傾向があること、「覺」ジョオ・「尿」ニョオなど、平度（青萊片）等他の膠遼官話にみえる韻母の特徴もあわせもっていることなどから、膠遼官話登連片煙威小片と完全に一致するわけではない。

[2] 荻山貞一. 1944. 『滿支旅行用語』。新京：東亞書院。

判型：105mm×150mm, 190頁, 縦書き。

著者の荻山貞一氏は生卒年・経歴不詳。本書のほかに『滿語華語檢定試験の受け方とその準備』（1944年, 新京・東亞書院）という著書がある（李素楨・田剛 2010）。

本文は「先づ知って置きたい單語」, 「差當り必要な言葉」および場面会話（第1課～第18課）の三つの部分からなる。場面会話は会話（上段に中国語・下段は日本語訳）と單語からなり、会話部分は日本人と現地の中国人との対話である。日本語訳部分が一字下げになっているものは、現地の中国人のことが「滿洲音」表記されていることをしめしている。

中国語の表記はカナが主（左側）、漢字が従（右側）である。本書の特色は、日本語の高低アクセントを参考にしてカナの字体を工夫し、高い音を太字、低い音を細字にして、声調をあらわすようにしている点である。たとえば、「食堂シータン」の「シー」はシが低音を、長音記号の一は高音をあらわし、シー全体で低高となるために、中国語の上昇調（陽平）に類似したものとなる。

例： 食堂 シータン 日本 イーベン

本書の「滿洲音」の音韻的特徴は、(1)日母字と喻母合口字は基本的にゼ

ロ声母, (2)見曉組が口蓋化し尖団が合流, (3)知莊章組が精組 ts -, ts^h -, s - に合流する傾向等である。

つぎに, これらの学習書のカナによる音声表記に基づいて同音字表を作成し, 現代膠遼官話・東北官話等と比較することにより, その音声的特徴を検討する。

2.1.3. 学習書の音韻特徴

以下, つぎの四項目, [1] 止摂開口以外の日母字と喻母字, [2] 尖団音, [3] 知莊章組字, [4] 蟹止山臻撮合口一等端母系字の特徴について検討し, つづいて, それ以外の六項目の特徴について検討する。

[1] 止摂開口以外の日母字と喻母合口字

膠遼官話と東北官話では, 止摂開口以外の多くの日母字, および喻母合口字の一部はゼロ声母である。この傾向は, 学習書でも同様である (表7)。なお, 『旅行』では「入」がルー5となっているが, これは $zu5$ という字音であったと考えられる。 $zu5$ は興城・長春など東北官話哈阜片長錦小片に見える¹²⁾。

表7 止摂開口以外の日母字および喻母合口字

例字	中古音			東北官話		膠遼官話		学習書			
	声	韻	調	瀋陽	長春	牟平	大連	満韓	講義	衛生	旅行
熱	日	山開三薛	入	ie5	ie5	iə3	iə5	イーエ	イエ	イエ (ie)5	イエ5
人	日	臻開三真	平	in1	in2	in1	in2	イン	イン	イン (in)2	イン3
日	日	臻開三真	入	i5	zɿ5	i3	i5	イー	イ	イイ (ih)5	イー5
入	日	深開三緝	入	iu5	y5/ zu5	y3	y3		ユ	ユウ (yü)5 ヨー (yo)5	ルー5
容	喻	通合三鍾	平	yn2	yn2	ion1	yn2		ヨン		ユン2

[2] 尖団音

尖団音について『衛生』と『旅行』は大きくことなる。すなわち、前者は尖団を区別し、後者は尖団が合流しているのである。

『衛生』は尖団の区別とともに、団音字の声母は、調音点が前よりにずれてはいるが中古音見曉組の軟口蓋音の特徴 (c, c^h, ɕ) を保存している。たとえば、「幾」はギイ, 「今」はキン, 「喜」はヒと記述されている。これは膠遼官話登連片煙威小片などと同様の特徴である。ただし、一部の見曉組字には, 「去」{キ/チ} ユイ・「急」{ギ/チ} イ (gi/zi)・「經」ギン (gin)l / zinl のように, 声母の調音点がさらに前にずれて硬口蓋と齒茎硬口蓋の間にある, つまり口蓋化しつつあると考えられるものや, 「計」ヂ・「窮」ヂユン (zin) のようにすでに口蓋化しているものがみられる。このことから, 字または地域によっては見曉組の口蓋化が進行中, あるいはすでに完了していたと考えられる¹³⁾。一方『旅行』は, 見曉組と精組が口蓋化し, 尖団音が合流している。これは膠遼官話營通片および東北官話吉藩片と共通する (表8)。表9は膠遼官話を反映する『満韓』から『親善』, そして東北官話を反映する『旅行』の団音字の発音表記を対照させたものである。大まかな傾向として, 『満韓』『講義』は軟口蓋音的であるが, 『衛生』は一部が口蓋化し, 『関東』『親善』ではすべて口蓋化している。これらの学習書の言語がどの地域・地点のものかは特定できないが, 軟口蓋から齒茎硬口蓋にいたる口蓋化の過程を, ほぼ時系列にそってしめしているという解釈も可能であろう。ただし, 『衛生』『関東』『親善』の出版時期は1936~1940年の間と, 誤差程度であるので, これは地域的差異であるとも考えられる。『関東』『親善』のことは関東州の膠遼官話である可能性もある。このほか, 上述した団音字の音声特徴は, 『満韓』『講義』等のほか, 『記憶スルニ易ク實用ニ適スル日滿會話』(1912年)・『最新支那語大辭典』等にも記述されている。

表8 尖団音の状況

例字	声母	東北官話		膠遼官話				学習書	
		瀋陽	長春	牟平	榮成	平度	丹東	衛生	旅行
就	從	tɕiəu5	tɕiəu5	tɕiəu5	tsiou5	tsiou2	tɕiəu5		ヂウ 5
救	見	tɕiəu5	tɕiəu5	ciou5	ciou5	ciou1/2		キウ (kyu)5	
進	精	tɕin5	tɕin5	tɕin5	tsin5	tsiɔ̃1/2	tɕin5	{チ/ヂ}ン	デン 5
近	群	tɕin5	tɕin5	cin5	cin5	ciɔ̃1/2	tɕin5	キン (kin)5	デン 5
井	精	tɕin3	tɕin3	tɕin3	tsin3	tsin3	tɕin3	ヂ{エ/イ}ン(zien)3	
經	見	tɕin1	tɕin1	cin1	cin1	cin1	tɕin1	ギン(gin)1/zin1	デン 1

表9 団音字の状況

等	例字	学習書						膠遼
		満韓	講義	衛生	関東	親善	旅行	牟平
2	家	キヤー		{ヂ/ギ}ヤ		ヂア / ジア	ヂア	cia1
	覺睡覺			ジョオ	ヂヨー	ジョ / ジオ	ヂアオ	ciao5
	覺知覺			ギョオ			ヂアオ	cyuo3
3	去	キユイ	キユイ / キユイ	{キ/チ}ユイ	チュイ	チュイ	チュイ	c ^h y5
	幾	キー		ギイ	チー	ジイ	ヂー	ci3
	喜		ヒ	ヒ		シイ		çi3
	今	キン	キヌ	キン		ヂェン / ジン	デン	cin1
4	見		キエヌ / ケヌ	{ヂ/ゲ}エン		ゼン / ジエン	ヂエン	cian5
	叫	キョオ / キョ		{ジ/ヂ}ャオ	チイヤオ	ヂョウ	ヂアオ	ciao5

以上の点から、膠遼官話では、少なくとも20世紀前半においては、尖団の区別がなお保存されていたが、地域によっては団音字の口蓋化、さらに尖団の合流が進行していたことが推定できる。

東北官話の音韻体系を反映する『黄鐘通韻』（1744年）では、すでに18世紀中期には尖団音が合流している（鄒徳文 2016:111）。東北の膠遼官話登連片の尖団の合流は東北官話よりも明らかにおそいのである。

ところで、ギョーザのギョーは、「餃子」の「餃」の字音に相当するが、この字の登場は比較のおそく、使用例は宋代からである（程艷 2013）。反切は、『集韻』（1039年）では居效切、『正字通』（1671年）では古孝切なのだが、これらの反切上字は見母であり、本来軟口蓋音である。『正字通』にはさらに、「餃」は「水餃餌」であり、「水餃餌」は「粉角」ともいって、北方人は「角」を「矯」のように読むという記述が見える¹⁴⁾。「矯」も声母は見母で、団音字である。たとえば、膠遼官話登連片の牟平では「餃」と「矯」は同音の ciao3 である。上掲の学習書には直接的証拠は見当たらないが、旧満洲でも「餃」がギョーという字音であったことは十分に考えられることである。

この「餃」は、現代の「餃子」とどうつながるのであろうか。『集韻』では「飴」と記述しているが、『正字通』には「水餃餌」は「湯中牢丸」でもあるという記述がある。『通雅』（明・方以智撰）は「湯中牢丸」とは「元宵湯圓或水餃餌」と記しているために、モチゴメでつくる団子状の食べ物を指していた可能性がある。一方、『隨園食單』（袁枚, 1792年）には「肉餃」という例があり、これは今日の餃子と同じもののようである¹⁵⁾。

[3] 知莊章組字

中古音知莊章組の声母は、表4に示めたように、膠遼官話登連片・青萊片では甲乙の二つのグループにわかれるが、營通片ではわかれぬ（錢曾怡 2004）。一方、東北官話では、表3に示めたように、興城（哈阜片長錦小片）・瀋陽（吉瀋片通溪小片）・吉林（吉瀋片蛟寧小片）等では知莊章組は精組と合流している。『旅行』では、すべてがサ・ス・セ・ソ・ツァ・ツ・ザ・ズ・ヅ等、ts, ts^h, s, dz, z 等に相当する声母であるが（表10・表11）、これは、瀋陽の特徴と一致している（表3、瀋陽型）。一方、『衛生』は、甲類がサ・ス・ソ・ツと ts, ts^h, s 相当であるが（表10）、乙類はシ・シャ・シュ・ショ・チ・チャ・チュ等、前舌狭母音 i や y を後にともう可能性がある

ものであり(表11), 対応する声母としては $t\epsilon$, tj , $t\varsigma$, $t\epsilon^h$, tj^h , $t\varsigma^h$, ϵ , j , ς 等の可能性がある。表10・表11で挙げた膠遼官話の4地点のうち, この組み合わせに近いものは登連片煙威小片の牟平で, 甲類が ts , ts^h , s , 乙類が $t\epsilon$, $t\epsilon^h$, ϵ である。よって、『衛生』は膠遼官話登連片の特徴をもつものといえる。その他の学習書でも、『満韓』『講義』は『衛生』と同様の傾向を持つことがわかる。一方、『関東』『親善』はややことなる状況を呈している。たとえば『関東』は甲類の「船」がチュアン, 「莊」がチヨワンであり, ts , ts^h , s ではなく $t\epsilon$, tj , $t\varsigma$ 類を想起させる記述となっている。また『親善』は「焼」にスアオという字音もつけるなど, 膠遼官話營通片または東北官話の特徴がはいりこんでいるようにも見受けられる。

表10 知莊章組字 甲類

例字	中古音			東北官話		膠遼官話			
	声	韻	調	瀋陽	長春	牟平	榮成	平度	丹東
是	禪	止開三紙	上	$\varsigma j5$	$\varsigma j5$	$\varsigma j2/5$	$\varsigma j5$	$\varsigma j2$	$\varsigma j5$
睡	禪	止合三寘	去	$suei5$	$suei5$	$suei5$	$suei5$	$\$uei1/2$	
水	生	止合三旨	上	$suei3$	$suei3$	$suei3$	$suei3$	$suei3$	$sei3/suei3$
站	知	咸開二陷	去	$tsan5$	$t\varsigma an5$	$tsan5$	$t\varsigma an5$	$t\varsigma \bar{a}1$	$tsan5$
山	生	山開二山	平	$san1$	$\$an1$	$san1$	$\$an1$	$\$an1$	$san1$
船	船	山合三仙	平	ts^huan2	ts^huan2	ts^huan2	$t\varsigma^huan2$	$tj^hu\bar{a}2$	ts^huan2
莊	莊	宕開三陽	平	$tsuanj1$	$t\varsigma uanj1$	$tsuanj1$	$t\varsigma uanj1$	$t\varsigma uanj1$	$tsuanj1$
生	生	梗開二庚	平	$s\bar{e}nj1$	$\$anj1$	$s\bar{e}nj1$	$\$anj1$	$\$onj1$	$s\bar{e}nj1$
例字	学習書								
	満韓		講義	衛生		関東	親善	旅行	
是	スー			ス(su)4		スー	ス	スー 5	
睡			ス	スイ(sui)4		スイ	スイ		
水	スイ		スイ	{ス/シュ}イ		シウイ	スイ	スイ 3	
站			ツヤヌ	ツアン(tzan)4		ザヤヌ	ザン	ザン 3?	
山	サン/サヌ		サヌ	サン(san)1		シヤン	サン	サン	
船	ツオワン/ツアン		ツヨワヌ	ツウアン(tzuan)2		チュアン	ツアン	ツアン 2	
莊	ヅアン			ツ{オ/ウ}アン(tzoan)1		チヨワン			
生	スン		ソン	スン(sun)1			スン/スエン	ソン 0	

表11 知莊章組字 乙類

例字	中古音			東北官話		膠遼官話			
	声	韻	調	瀋陽	長春	牟平	榮成	平度	丹東
車	昌	假開三麻	平	tsʰɿ1	tsʰɿ1	tɕʰia1	tʃʰɛ1	tʃʰə1	tsʰə1
知	知	止開三支	平	tsɿ1	tsɿ1	tɕil	tʃɿ1	tʃɿ1	tsɿ1
燒	生	效開三宵	平	sau1	ɕau1	ciau1	fau1	fɔ1	saɔ1
手	書	流開三有	上	səu3	ɕəu3	ciou3	fou3	fou3	sou3
十	禪	深開三緝	入	sɿ2	ɕɿ2	ci5	fɿ5	fɿ5	ɕɿ2
說	書	山合三薛	入	suv1	ɕuv1	cyə3/suo3	fye3	fua3	suɔ1
身	生	臻開三真	平	sən1	sən1	cin1	fən1	fəl	sən1
出	昌	臻合三術	入	tsʰu1	tsʰu1	tɕʰy3	tʃʰu3	tʃʰu3	tsʰu3
張	知	宕開三陽	平	tsaŋ1	tsaŋ1	tɕiaŋ1	tʃaŋ1	tʃaŋ1	tsaŋ1
粥	章	通合三屋	入	tsəu1	tsəu1	tɕy3/tɕiou1	tʃu3	tʃu3	tsou1
例字	学習書								
	満韓		講義	衛生	関東	親善		旅行	
車	チェー	チイエ	チ{オ/ヤ}(chê)1	チャオ	チェー	ツォー1			
知	チー	チイ	チ	チー	チイ./ジイ	ヅ1/ズー1			
燒	シヨ	シイヤヲ	シャオ/シアオ		シヨウ/スアオ				
手		シイヲ	シ{ユ/ヨオ}shū3	シィォウ	シュウ/シウ				
十	シー	シイ	シイ(shi)1	シー	シイ	スー2			
說	ソー/ソオ	シイヲ/シイエ	シュオ	シヨ	スオ	スオ1			
身	シン	シヌ	シン(shin)1	シィエヌ/シエン	シェン/シン/セン	セン1			
出	チュ		チュ	チュウ/チウ	チュイ/チュウ	ツー1			
張			チャン		ツァン/ジャン/チャン	ザン1			
粥			チュウ(chyü)1		ジュウ				

[4] 蟹止山臻撮合口一等端母系字のu介音の脱落

表12に示したように、膠遼官話登連片・青萊片では、蟹止山臻撮合口端母系字では介音uがおちる。また、「暖」「亂」「卵」等一部の字について

は、東北官話吉瀋片・哈阜片でも同様の特徴がある。学習書にも同様の傾向がある。『旅行』では、このような特徴がみえるのは「暖」ナン 3 一例のみで、「對」ドイ 5・「緞」ドアン 5 には u 介音が存在していると考えられる。この点については瀋陽（吉瀋片通溪小片）と一致していること、また他

表12 蟹止山臻撮合口端母系字

例字	中古音			東北官話		膠遼官話					
	声	韻	調	瀋陽	長春	牟平	榮成	平度	諸城	大連	丹東
腿	透	蟹合一賄	上	t ^h uei3	t ^h uei3	t ^h ei3	t ^h ei3	t ^h ei3	t ^h uei3	t ^h əi3	t ^h ei3/ t ^h uei3
對	端	蟹合一隊	去	tuei5	tuei5	tei5	tei5	tei2	tuei5	təi5	tei5/ tuei5
短	端	山合一緩	上	tuan3	tuan3	tan3	tan3	tā3		tuan3	tan3. tuan3
斷	定	山合一緩	上	tuan5	tuan5	tan5	tan5	tā2		tuan5	tan5/ tuan5
暖	泥	山合一緩	上	nan3	nan3	nan1/ nao3	nan3	nā3	nuā3	nan3	nan3/ nuan3
卵	來	山合一緩	上	lan3	lan3	lan3	lan3	lā2/3		lan3	lan3
緞	定	山合一換	去	tuan5	tuan5	tan5	tan5	tā2	tuan5	tuan5	tan5/ tuan5
亂	來	山合一換	去	lan5	lan5	lan5	lan5	lā1	luā5	lan5	lan5/ luan5
論	來	臻合一恩	去	luən5	luən5	lən5	lən5	lō1/2	luō5	lən5	lən5/ luən5
村	清	臻合一魂	平	ts ^h uən1	ts ^h uən1	ts ^h ən1	ts ^h ən1	ts ^h əl	t ^h uəl	ts ^h uən1	ts ^h ən1/ ts ^h uən1
学習書											
例字	滿韓		講義	衛生			親善		旅行		
腿				テイ (tei)3			テイ				
對	テー			トイ (toi)5			デイ		ドイ 5		
短			タヌ								
斷				ダン (dan)5							
暖				ナン (nan)3					ナン 3		
卵				ラン (lan)3/luan(ロワン)							
緞	タン						ダアン		ドアン 5		
亂	ラム			ラン (lan)5			ラン				
論							レン				
村				ツオン/son1			ツエン				

の吉瀋片通溪小片の特徴も考慮すると、『旅行』の東北官話は吉瀋片通溪小片の可能性が高い。一方『衛生』は「對」トイ 5・「村」ツオン以外は、「腿」テイ 3・「斷」ダン 5・「暖」ナン 3・「亂」ラン 5 等が膠遼官話登連片と並行している。同様の傾向は『満韓』『講義』『親善』にもみられる。なお『衛生』の「對」、『満韓』の「隊」については、たとえば大連の tai5 に由来する可能性も否定できない。

以上、項目[1]～[4]についての検討から、『旅行』には瀋陽など東北官話吉瀋片通溪小片の音韻特徴が顕著である一方、『衛生』では膠遼官話登連片煙威小片の特徴が顕著であることが指摘できるだろう。

つぎに、主として『衛生』について、以下の項目[5]～[10]について検討したい。

[5] 疑影母開口一等字

『衛生』には「按」(ナ) アン (nan) 5 / non5, 「愛」(ナ) アイ (nai) 5 のような記述がある。「按」には「an4の儘にて可なるも、non4又はnan4の如く発音せるを聞きしことあり」(p.32) という注記がある。このような n 声母は東北官話哈阜片の特徴で、北京官話でゼロ声母になる“鵝愛安”などにはいずれも n- が現れる。一方、膠遼官話は、多くはゼロ声母である(表 13)。このことから『衛生』の反映する膠遼官話が東北官話の影響をこうもっていたか、または膠遼・東北官話両方の音声を記述した可能性があるといえる。

表13 東北官話・膠遼官話における疑・影母開口一等字

例 字	中古音			東北官話		膠遼官話					
	声	韻	調	瀋陽	長春	牟平	榮成	平度	諸城	大連	丹東
愛	影	蟹開一代	去	nai5	nai5	ai5	ai5	ɛ1	ŋɛ5	ai5	ai5
按	影	山開一翰	去	an5	nan5	an5	an5	ā1		an1	an5

[6] 曾梗摂開口三等知莊章組字

曾梗摂開口三等知莊章組字の韻母は、北京官話では əŋ であるが、膠遼官話登連片煙威小片では iŋ である。たとえば牟平では、「徵」tcin1・「正」政」tcin5・「成」城」tc^hiŋ2・「繩」cin2・「盛」(興盛) cin5である。『衛生』には一例のみであるが、「繩」がシン(shin)2と記述されている。類例として、『満韓』「城」チン・「盛」シン、『親善』「聲」シン・「正」ジン・「政」ヂイン等がある。これは韻母が iŋ となる膠遼官話登連片煙威小片の特徴と並行している。

なお、梗摂開口三・四等字は、口の開き具合が広いようで、『衛生』では iəŋ のように発音される傾向があると考えられる。たとえば、「井」ヂ{エ/イ}ン(zien)3・「聽」{テ/チ}エン(ten)1・「定」デイン(den)5である。「聽」については「ten1と発音せざれば理解せず」(p. 72)という注記がなされている。

[7] 深臻摂開口三等莊章組・日母字

深臻摂開口三等の莊章組・日母字の韻母は、北京官話等では ən であるが、膠遼官話登連片煙威小片では in となる。たとえば、牟平では「真」tcin1, 「疹」tcin3, 「沉」tc^hin2, 「身」cin1, 「神」cin2, 「人」in1である。『衛生』はこれと平行し、「疹」チン(chin)3・「身」シン(shin)1・「人」イン(in)2である。「身」については「shin1にて可なり。shên1にては理解せず」(p. 40)という注記がある。その他の学習書にも、『満韓』「深」シン・「身」シン・「人」イン、『講義』「身」シヌ・「人」イン、『親善』「神」シン・「人」インのように、類例がみえる。

[8] 效摂字

『衛生』には、韻母について (i) au と (i) ɔ の混在ともいうべき現象が存在する。たとえば「澡」には zao3 と zo3 の二つの音注がなされている場合である。また效摂字であっても「叫」は{ジ/ヂ}ヤオ(ziao)5 であるが、「覺」(睡覺)はジョオ(zyo)5 である。效摂は、登連・營通片では (i) au に、青萊

表14 效摂字の (i) au / (i) ɔ の混在

例 字	中古音			登連			青葉		營通	学習書
	声	韻	調	牟平	榮成	大連	平度	諸城	丹東	衛生
叫	見	效開四嘯	去	ciao5	ciau5	tɕiau5	ciɔ1/2	tɕɔ5	tɕiao5	{ジ/ヂ}ャオ (ziao)5
覺	見	效開二效	去	ciao5	tsiau5/ ciau5	tɕiau5	ciɔ1		tɕiau5	ジョオ (zyo)5
燒	生	效開三宵	平	ciao1	fau1	ɕau1	fɔ1	ɕɔ1	sao1	シャオ / シア オ
小	心	效開三小	上	ciao3	siau3	ciau3	siɔ3	ɕiɔ3	ciau3	ショオ (sho)3
澡	精	效開一皓	上	tsao3	tsau3	tsau3	tθɔ3		tsau3	zao3/zo3
療	來	效開三笑	去	liao5	liau5	liau2	liɔ2		liau2	lyo2

片では (i) ɔ になるが、それぞれの下位方言の内部で (i) au と (i) ɔ が混在することはない (表14)。一方、このような混在は、『親善』等ほかの学習書にも見える。たとえば、『満韓』では「小」シャウ／ショ、『親善』では「包」パオ／ポウ・「小」シャオ／シオ・「燒」スアオ／ショウ・「照」ザオ／ゾウ等である。同摂異字の場合も「毛」モウ／「找」ザオ (『親善』) のように混在が見える。この理由は定かではないが、学習書の記述が正確であることを前提とした場合、言語接触等の外的要因や言語内部における変化等の内的要因が考えられる。外的要因としては、山東各地から東北に移住した言語集団の混在によって、言語接触が誘発され共通言語ができあがっていく過渡的状況をしめしていることも否定できないだろう。

[9] 蟹止臻撮合口三等幫組・喻母字

『衛生』では、北京官話の fei (肺), fən (分), uei (衛), uən (瘟) 等が fui, fun, ui, un と記述されている。「肺」には「fui4に発音せざれば理解せず」(p. 57), 「分」には「fun1と発音せざれば不可なり」(p. 34), 「衛」には「wi4と発音せざれば不可」(p. 66), 「瘟」には「un1に聞こゆ」(p. 53) という注記があり、北京官話とことなることが強調されている。fui, fun については現代の

膠遼官話には該当する形式が見つからないが、中古音では合口であり、中国東南部の客家語や閩語に円唇性をもつ韻母の類例がみえる。また、「瘟」ウン・「衛」ウイについては、煙台に un1, ui5 という字音が存在している。同様の字音は『最新支那語大辭典』にも記述されており、『満韓』『親善』にも類例がみえる。

[10] 「瘧」

「瘧」にはキイ (ki) 5 という字音が付されているが、これは牟平 ci5 (白話音) と同一であると考えられる。同様の字音は煙台・榮成・平度等周辺地域には見えないが、遠く福建廈門や広東潮州の閩南語に ki5 (白話音) として存在している (『漢語方言字匯』第二版)。これは、上古音から中古音への過渡期におきた第一口蓋化がおよばなかった例と考えられる。

以上検討した項目 [1]～[10] を総合すると、『衛生』の言語は膠遼官話登連片煙威小片 (牟平・煙台等) を基盤としていたが、青萊片的要素や、東北官話的特徴ももっていたことが指摘できる。また1930年代ごろには、膠遼官話登連片の分布域は現在よりも広く、長春以北まで広がっていたこと、ゆえに、ギョーザの言語的基盤も十分にあったことが理解できる。

2.1.4. 未解決の二つの問題

ここでは、未解決の二つの問題、すなわち、東北膠遼官話の見曉組の口蓋化と尖団音の合流、ならびに「餃子」という語形の有無について考察する。

[1] 東北膠遼官話の見曉組の口蓋化と尖団音の合流

2.1.3. [2] で検討したように、1940年ごろまでは、旧満洲の膠遼官話では見曉組の一部での口蓋化と尖団音の合流がおきていたが、尖団の区別など保守的状況はなお存在していた。ところが、1960年ごろには、遼東半島南岸の島嶼部以外では、尖団音の合流は完了していた (宋學 1963)。つまり、

見曉組の口蓋化と尖団音の合流は、20年余りの間に急激に進んだといえる。

このような急激な変化はおこりうるのであろうか。このような疑問には、Dixon (1997) の仮説が参考になる。Dixon は生物学の断続平衡モデル仮説 (punctuated equilibrium model) を言語の発展についての考察に応用し、言語の発展には安定した長い平衡期 (この間同一の言語圏が拡大) と、短期間に急激な変化がおきる中断期 (この間言語が分岐) があることを指摘している。中断期の要因には、言語接触等言語的なものと非言語的なものがあり、後者について自然的要因・物質的革新・侵略的勢力の三つを挙げている。近代の満洲地域についていえば、侵略的勢力の影響が最も大きいであろう。特に19世紀以降のロシア・日本による侵略と勢力拡大、そして20世紀中盤にかけて、日本の敗戦と満洲地域からの撤退、それにつづく国共内戦という大きな外的要因となるできごとが連続している。これらが引き金となって、遼東半島の膠遼官話にも急激な変化がおきた可能性がある。

[2]「餃子」の存在

『衛生』は膠遼官話登連片煙威小片を言語的基盤にしている。しかし、この地域の言語では〔餃子〕は本来「餛飩」であって「餃子」ではない (表15)。「餃子」は相対的に新しい語形なのである。つまり、戦前のギョーザの由来となる *ciau3 tsɿ0* (榮成) 等の語形は登連片には存在しなかったと考えられる。よって、那須 (1992) 等の回想とは矛盾するが、戦前に山東半島からギョーザに類する語形が満洲地域にはいつてきたとは考えにくいのである。一つの可能性としては、北京あるいは東北官話由来の「餃子」を当時の膠遼官話登連片の字音で発音したことが考えられる。前述した『旅行』の会話 (p.105) にもあったように、当時の語形は「餃子」が一般的であり、おそらく飲食店のメニュー等の表記も「餃子」のみであったと考えられる。つまり、現代の山東半島の膠遼官話区で新語形とされる *ciau3 tsɿ0* が、旧満洲では「餃子」を膠遼官話音で発音する形ですでに登場していたこと

表15 膠遼官話と東北官話の餃子（水餃子）を指す語

	地点	出典	「餛飩」系	「餃子」系	「水餃」系
膠遼	榮成	王淑霞 1995	ku1 tʂa0 餛飩	ciau3 tsɿ0 餃子	
	牟平	羅福騰 1997	ku1 tsər0 餛飩兒	ciao3 tɔ0 餃子	suei3 ciaor3 水餃兒
	煙台	錢曾怡等 1982	ku1 tsa0* 沾渣		
	平度	于克仁 1992	ku1 tʂa0 餛飩		
	即墨	趙日新等 1991	ku1 tʂa0 餛飩	tɕiɔ3 tɔɿ0 餃子	
	萊州	錢曾怡等 2005	ku1 tsa0 餛飩	tɕiɔ3 tsɿ0 餃子	
	昌邑	中嶋 1989	ku5 tʂa0 姑扎		
	大連	陳章太等 1996	ku1 tsɿ0 餛飩		
	丹東	陳章太等 1996		tɕiau3 tsɿ0 餃子	suei3 tɕiaur3 水餃兒
東北	瀋陽	陳章太等 1996		tɕiau3 tsɿ0 餃子	suei3 tɕiaur3 水餃兒
	長春	陳章太等 1996		tɕiau3 tsɿ0 餃子	

* 陰平（平声）の後の軽声の調値は21である。

になる。

一方、上述したように、ギョーザはマンジュ語由来とする説（石橋 2000）もある。これはマンジュ語にも *giyose* という語形があることに基づく。しかし、これは漢語由来の借用語といえる。その根拠の一つは、*se* が漢語の指小辞「子」の音訳語である点である¹⁶⁾。マンジュ語の音韻体系には *ts* のような破擦音がないために、「子」の声母は音訳語では *s* となるのだそうだ。マンジュ語・漢語・朝鮮語辞典である『漢清文鑑』（18世紀後半）では、マンジュ語の *giyose* にハングルで *교수* (*kjosu*) という音注が付されている。「子」の音訳語の発音は *su* または *sə* であった可能性がある（巻十二47a）。ちなみに、漢語の「餃子」にはハングルで *kijao dɜu* という音注が付されている。

ほかに指小辞「子」をもつ漢語由来と考えられるマンジュ語の例は、『満洲語文語辞典』（福田昆之、1987年）にあたると、以下のようなものがある。

boose 【包子】（包み）・caise 【釵子】（かんざし）・cense=cenze 【橙子】（金

柑)・cuse【厨子】(料理人)・cese【冊子】(冊子)・chise【池子】(池)・
giowanse /giowanze【卷子】(巻き物)・pingse【秤子】(秤)

以上の点から、ギョーザはマンジュ語由来ではなく、漢語のギョーザが借用されたといえるだろう¹⁷⁾。

3. おわりに

以上の検討により、つぎの二点をあきらかにすることができた。一つめは、ギョーザは旧満洲で、膠遼官話登連片煙威小片の発音によって借用され、敗戦による引き揚げで日本国内にもちこまれ、1950年代半ばまでに全国に普及したことである。二つめは、供給言語である膠遼官話登連片の分布域は現在よりも広く、長春以北まで広がっていたことである。

このほか、分析をととして戦前の日本人向け中国語学習書が、制限はあっても漢語史研究に寄与できることをしめすことができたのではないだろうか。

今後は、ギョーザの未解決の問題について引き続き検討してみたいとかんがえる。

注

- 1) 本論ではギョーザの指示対象を「[餃子]」と表記する。また、中国語表記や中国の地名・人名には基本的に繁体字を用いる。
- 2) 正確には、この間に「かうづら」(1909年)・「ビターマン」(1920年代)・「すいこう(水餃)」(1929年)等の呼称があった(魚柄 2020)。
- 3) 本論では、日本人が満洲の中国語を指すためにもちいた「満洲語」と区別するために、満洲民族の言語を「マンジュ語」と表記する。なお、『日本国語大辞典』(第二版)には、ギョーザは「旧満州語からという」という記述がある。この「旧満州語」がマンジュ語を指すのか、旧満洲の中国語を指すのかは不明である。なお、同辞典で立項されている「満州語」はマンジュ語であ

る。

- 4) 張志敏 (2012a,b) によれば、東北官話と北京官話を分かち特徴は以下の4点である。[1] 東北官話では中古音清音入声字が上声になっているものが北京官話よりもずっと多い、[2] 東北官話の陰平の調値は北京官話よりも低い、[3] 東北官話の多くは z 声母をもたない、[4] 中古音精知莊章組の状況が東北官話と北京官話ではことなる (表3・表5)。一方、錢曾怡主编 (2010) では、東北官話を北京官話の一部とみなしている。
- 5) 『中國語言地圖集 第2版 漢語方言卷』の区分は、[1] 登連片 [煙威・蓬龍・大岫]・[2] 青萊片 [膠蓮・萊昌・青臨]・[3] 蓋桓片である ([] 内は下位方言区)。
- 6) 三等韻字は用例がないために除外する。
- 7) 本書では、満洲の漢語が「山東方言」と「山西方言」であることを指摘し、さらに発音対照一覧「寫音法竝に滿洲土音一斑」については、渡會貞輔の研究に著者の私見を加えたものであることを述べている。なお、著者の宮脇も渡會同様大連在住であった。本書は個々の字音については部分的な記述しかないために、今回は分析対象からは除外した。
- 8) n をヌ、 η をンで表記する学習書もある。
- 9) カナによる体系的な音声表記を試みたものも少なくない。たとえば、台湾で出版された『臺日大辭典』(台湾総督府編, 1931年)や『標準廣東語典—附臺灣俚諺集・重要單語集』(菅向榮, 1933年)等がある。これらは補助記号等も利用した表記方法を採用し、声調もふくめて台湾閩南語や四県客家語(日本統治時代の台湾では「広東語」)を記述している。
- 10) 鯨澤 (2017) は本書に言及してはいるが、執筆者の経歴等についての指摘はない。
- 11) 原文では「チ」と「キ」が左右に並べられ、その上に「ㄣ」が配されて、「チ」と「キ」の中間的な音 (たとえば $[c]$) であることが示されている。本論では、併記部分を $\{ \}$ でくくり、「 $\{チ/キ\}$ ユイ」のように表記する。しかし、この原則にはずれるような記述も少なくない。たとえば、「頸」 $\{ガ/カ\}$ ンについて「kan3 又は gan3 に発音せざれば理解せず」(p. 62) と述べているように、 $\{ガ/カ\}$ ンはガとカの中間音ではなく、ガンまたはカンという選択的状況である。
- 12) 声調の調類はつぎのように数字で表記する。1 (陰平), 2 (陽平), 3 (上声), 5 (去声), 0 (輕声)。
- 13) 朝鮮朝末期の中国語学習書『你呢貴姓』(高宗期 1864-1906年に成書)は、東北の漢語(汪維輝編 2005:500, 鄒德文 2016)を、中でも遼寧省の漢語を反

映しているとされる（劉婷婷 2022）。劉婷婷（2022）によれば、中国語の対話文に付されたハングルによる字音表記では、団音字は基本的に口蓋化して *tc* 系列になっている。しかし、一部の「價」가 (*kja*)・「幾」기 (*ki*) 等は、ハングル表記の初声がㅏ (*k*) のみで表記されている。一方、「家」자 (*tja*), 가 (*kja*), 자 (*tja*)・「鶏」기 (*ki*), 지 (*tji*) 等のように、初声にㅏ (*k*) とㅈ (*tj*) の両方が用いられているものについては、当該字の声母が口蓋化の過渡的段階にあったと指摘されている。このことから、東北の漢語（おそらく膠遼官話）の団音字は、19世紀後半には口蓋化がはじまっていた一方、本来の軟口蓋音に由来する声母もなお保存されていたことがわかる。

- 14) 「水餃餌，即段成式食品，湯中牢丸。或謂之粉角，北人讀角如矯，因呼餃餌，譌爲餃兒。餃非餡屬，教非餃音。」『正字通』戌集下食部36a。
- 15) 「顛不稜，即肉餃也。糊麵攤開，裹肉爲餡蒸之。……（後略）」『隨園食單』點心單64b。
- 16) 神戸市外国語大学教授・竹越孝氏のご教示による。ここに記して謝意としたい。
- 17) 「餃」字が *kjao* のように軟口蓋音を保存しているのは、北京官話の尖団音合流以前の状況を反映している可能性がある。この点については、改めて考察したい。

参 考 文 献

〔日本語〕

- 青砥頭夫 (1910) 『支那語の講義 發音編 語法編 異同辨 附北京音と滿洲音の比較』大連：小林又七支店
- 石橋崇雄 (2000) 『大清帝国』（講談社選書メチエ）東京：講談社
- 石山福治 (1935 [1938]) 『最新支那語大辭典』東京：第一書房
- 植原路郎 (1962) 「明治大正昭和 飲食物年表 第二部大正篇昭和篇」『中国菜』5:60-63
- 魚柄仁之助 (2020) 『国民食の履歴書—カレー、マヨネーズ、ソース、餃子、肉じゃが』東京：青弓社
- 漆畑真紀子 (2013) 「滿洲鏡泊学園とその設立過程について」『楓原：国士館史研究年報』5:29-50
- 荻山貞一 (1944) 『滿支旅行用語』新京：東亞書院
- 關東軍軍醫部編 (1936) 『衛生部員ニ必要ナル滿洲土語』。康德圖書印刷所
- 北原保雄等編著 (2003) 『日本国語大辭典（第二版）』東京：小学館

- 桜井隆 (2015) 『戦時下のピジン中国語—「協和語」「兵隊支那語」など』 東京：三元社
- 染木煦 (1941) 『北満民具探訪手記』 東京：座右寶刊行會
- 立川談志 (2000) 『秘蔵版 談志喰い物咄』 東京：講談社
- 竹中憲一 (2004) 『「満州」における中国語教育』 東京：柏書房
- 田中静一 (1987) 『一衣帯水—中国料理伝来史』 東京：柴田書店
- 田中静一 (2014) 「ギョーザ」『改訂新版 世界大百科事典』 東京：平凡社
- 出村良一 (1932 [1938]) 「満洲語に就いて」『短期支那語講座 附・滿蒙語會話』 (第一卷) 東京：外語學院出版部, 1-15
- 中嶋幹起 (1989) 『山東方言基礎語彙集』 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 那須清 (1992) 『旧外地における中国語教育』 東京：不二出版
- 日本國際觀光局滿洲支部編 (1940) 『滿支旅行年鑑 昭和15年』 東京：博文館
- 福田昆之 (1987) 『滿洲語文語辞典』 横浜：FLL
- 古川緑波 (1995) 『ロッパの悲食記』 (ちくま文庫) 東京：筑摩書房
- 鯉澤彰夫 (2017) 「明治以降漢語教育史資料の私の蒐集遍歴」『関西大学東西学術研究所所蔵 鯉澤文庫目録』, 11-25
- 松本一男 (1957) 「ラーメン、シューマイ、ギョウザ」『大安』 3-11:11-13
- 李素楨・田剛 (2010) 「掘り起こした中国語教育文献の研究：旧「満州」における日本人の中国語検定試験について」『成城大学 共通教育論集』 3:65-81
- 渡會貞輔 (1932) 『支那語漫談』 大連：大阪屋號書店
〔中国語〕
- 北京大學中國語言文學系語言學教研室編 (2003) 『漢語方言字匯』 (第二版) 北京：語文出版社
- 陳章太・李行健主編 (1996) 『普通話基礎方言基本詞彙集』 (語音卷 上) 北京：語文出版社
- 程艷 (2013) 「釋“餃子”」『理論界』 2013-12:68-70
- 劉麗麗 (2020) 『大連方言語音研究』 北京：社會科學文獻出版社
- 羅福騰 (1992) 『牟平方言志』 (山東方言志叢書) 北京：語文出版社
- 羅福騰 (1997) 『牟平方言詞典』 南京：江蘇教育出版社
- 錢曾怡 (1982) 『煙台方言報告』 濟南：齊魯書社
- 錢曾怡 (2004) 「古知莊章聲母在山東方言中的分化及其跟精見組的關係」『中國語文』 2004-6: 536-544
- 錢曾怡主編 (2010) 『漢語官話方言研究』 濟南：齊魯書社
- 宋學 (1963) 「遼寧語音略說」『中國語文』 1963-2:104-114

- 王淑霞 (1995) 『榮成方言志』 (山東方言志叢書) 北京: 語文出版社
- 汪維輝編 (2005) 『朝鮮時代漢語教科書叢刊』 (一) 北京: 中華書局
- 于克仁 (1992) 『平度方言志』 (山東方言志叢書) 北京: 語文出版社
- 張樹錚 (2012) 「官話之四 膠遼官話」『中國語言地圖集 第2版 漢語方言卷』 49-54
- 張志敏 (2012a) 「官話之一 東北官話」『中國語言地圖集 第2版 漢語方言卷』 35-39
- 張志敏 (2012b) 「官話之一 北京官話」『中國語言地圖集 第2版 漢語方言卷』 40-43
- 中國社會科學院語言研究所等編 (2012) 『中國語言地圖集 第2版 漢語方言卷』 北京: 商務印書館
- 鄒德文 (2016) 『清代東北方言語音研究』 北京: 社會科學文獻出版社
〔朝鮮語〕
- 劉婷婷 (2022) 『『你呢貴姓』의 音韻研究』 (濟州大學校大學院中語中文學科博士學位論文)
〔英語〕
- Dixon, R.M.W. (1997) *The rise and fall of languages*. Cambridge: Cambridge University Press (大角翠訳 (2001) 『言語の興亡』 (岩波新書737) 岩波書店)